

## 論文の内容の要旨

論文題目 17世紀ハルハ=モンゴルの権力構造と中央ユーラシア東部情勢

氏名 前野 利衣

チンギス=カンに始まるモンゴル帝国の解体後、ユーラシア大陸の各地には様々な継承国家が誕生したが、その根拠地であったモンゴル高原の歴史は、モンゴル通史上不明点の多い時代として残されている。特に17世紀は、独立を失って清に服属するため、通史を二分する契機として注目されてきた。この時代の中央ユーラシア東部では、東方に清、北方にはハルハやオイラトといったモンゴル系諸勢力、チベットにはダライラマ5世による政教一致の政権が誕生し、それぞれ独立していた。

ハルハとは、現代モンゴル国の直接の淵源でもある遊牧集団であり、チンギス=カン直系のボルジギン氏族が領主層をなしていた。ハルハは17世紀には左右翼に分かれており、北から南に向かって東方を左翼、西方を右翼と呼んでいた。左翼にはトゥシェート=ハーン・セツェン=ハーンという君主がおり、右翼はザサグト=ハーンという君主が率いた。本論文は、モンゴル高原でいまだ独立を保っていたハルハの権力構造を解明し、同時代の中央ユーラシア東部情勢の新たな側面を提示するものである。

論文は二部で構成され、第I部では支配体制の理解に不可欠な領主層の地位・称号を取り上げて、17世紀ハルハの権力構造を提示する。以下は第I部全5章の要旨である。

17世紀のハルハには、特定家系で継承される3つのハーン位が1650年頃から鼎立していたが、当初は各ハーンがそれぞれ固有の称号を名乗り、よく知られる3ハーン号が受け継がれる称号となるのは17世紀末である。この時代のハーンは、戦時の動員・会盟・ウルス  
の分配・裁判において諸侯の筆頭に立つ存在であった。その地位の継承に際しては、理想

的な継承者は先代の長子と定められ、それが難しい場合に継承権は歴代ハーンの直系子孫にまで認められたが、その中でも年長の者が特に優先された。

ハーンに次ぐ副王の地位には、ホンタイジ・ジノンの2つがある。17世紀の右翼のホンタイジ家はオイラト支配や対ロシア交渉によって勢力を増していた。他方、ジノンにはこの時代2つの意味があり、第一にはゲレセンジェの次子系であるホンゴルの長子系・4子系だけが継承する唯一無二の地位である。第二には、複数存在することもありうる有力なノヤンの称号である。前者の歴代ジノンたちは、ベスド部という有力遊牧集団を権力の基盤とし、ハーンに次ぐ一大勢力を率いていた。その地位の高さはハルハ内だけでなく、清やダライラマ政権においても知られていた。したがって、右翼にはハーン・ホンタイジ・ジノンという特定家系で継承される3つの地位があったことになり、それらの地位にある者（及びその家系）がそれぞれの勢力をなし、右翼全体では三核の構造をとっていたと考えられる。

ハーンらより一段下にあつてハーンの議政に参与する諸侯は、ザサグと呼ばれた。ザサグはゲレセンジェの諸子の近縁諸侯の地位であり、会盟に参加して法を司る権限があり、その地位は事実上世襲されていた。

視点をチベット仏教界に向けると、右翼でも左翼のジェブツンダンバ1世らの誕生より早くから、中央チベットの高僧がハーンらの子弟として転生していた。こうしたボルジギン氏族の転生僧は、世俗の権威と仏教界での地位とを2つながら兼ね備えており、ハーンら為政者は彼らと提携して内政や隣接勢力との交渉にあたっていた。ハーンと転生僧との提携関係は、右翼で代替わりごとに当主と高僧との関係が血縁的に近づいた結果生み出されたものである。また、左右翼の仏教界には宗派の点で違いがあり、左翼王侯はサキャ派を重んじていたのに対して、右翼の転生僧たちはゲルク派の高僧の転生者であった。

第I部で取り上げた支配者層の枢要な地位の人選に際して、ダライラマ5世の意向やジャルリグ（おおせ）が決定的な影響力を持っていたことは、近年内陸アジア史分野で模索される中央ユーラシア東部の秩序像の議論において重要である。第II部では、そうした議論の中で清皇帝やダライラマから支配・影響を受ける存在として位置づけられるモンゴルの視点からこの地域の情勢を模索し、中央ユーラシア東部の新たな一面を提示する。

この時代のハルハ・清関係のキーワードの一つは、17世紀半ば以降になし崩しに清皇帝からハルハ諸侯に授けられた扎薩克という地位称号である。扎薩克の任命はハルハ側の人選や積極的な要請によって行なわれていたのであり、この時期の両者関係を清がハルハを包摂していく過程としてではなく、ハルハ側からも積極的な働きかけがあったことにも注意して捉え直す必要がある。

清・モンゴル・チベットの三者関係に目を向けると、清が冊封・朝貢と呼ぶ一連の儀礼と酷似した儀礼をダライラマ政権側も行なっており、謁見・交渉・交易の型自体は清とダライラマ政権で共通のものがあったと言える。また、元来モンゴル帝国の大ハーンしか用いることができなかつたジャルリグを、この時代には清皇帝とダライラマが互いに用いて

いたこと、ハルハ諸侯はこの二者にはジャルリグを送れなかったことから、この時代の中央ユーラシア東部では（モンゴル語書簡の形式上）清皇帝とダライラマ 5 世が 2 つの頂をなしていたと考えられる。この理解は、清皇帝を単一の中心とする秩序像とは異なるものであり、仏教的位置づけを持つ複数の王権の併存を許容する「チベット仏教世界」の議論を精緻化したものであると言える。